明海大学
不動産学部

不動産の話題 [34]

学生と教員の見方

〈景観資源の評価②〉

歴史的構造物がもたらす効果

まちの雰囲気をつくる要素

浜松市 須佐之男神社の場合

【学生の見方&考え方】
（3年 鈴木梨仁）

環境法のゼミで景観をテーマとした中で、歴史的建造物の街との調和について検討する機会があった。私は静岡県浜松市出身なので実家の近くにある須佐之男（すさのお）神社に着目した。

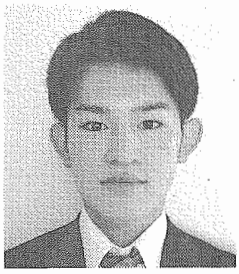
創建時期は697年と言われている。規模は比較的小さく、主な建物としては本殿と拝殿がある。周囲の建物も比較的低く、中高層の建物が少ない。周辺の市街地を抜けて軽い坂道を上がると神社の入り口がある。

社寺は緑色をしていて、境内には木が多く植えられ、航空写真で見ると周囲と隔絶しているようにも見えるが、周囲の住宅にも生垣や庭木が多いため、近くに行くと違和感は感じない。

神社の入り口の大きな社号標の文字は東郷平八郎が書いたとされ、歴史を感じさせる。神社の入り口には鳥居があるが、素材が石で灰色なので住宅街に溶け込んでいる。神社の中や周りに緑がたくさんあり、神社も派手な見た目ではなく街との調和が取れている。

須佐之男神社では例祭、七五三、大祓式などさまざまな行事を行っており、正月には毎年数多くの地域住民が初詣のお参りとして訪れている。実際に自分で足を運んでみると、地図の印象と異なり、坂道が多く道路も入り組んでいてたどり着くまでに大変だった。

今まで寺社仏閣は大きくて、派手なものが良いというイメージがあったが、実際に調べてみると規模が小さくても周りの景観との調和、どんなイベントをしているのかがポイントになってくると思った。



【アピールポイント】
サッカー観戦が好きです。特にイングランドが好きでユーロ2024では全試合ネット観戦しました。

【教員による展開】
（浜島裕美教授）

建築物や工作物など大きな構造物は、それ単体で景観の構成要素となるし、周囲の街並みを背景として街全体の雰囲気を作る主体ともなる。新たに建築物を計画する際、周辺の街並みとの調和は欠かすことのできない視点である。最近ではあるハウスメーカーが建築した新築マンションが富士山の眺望を阻害することを一つの理由として、メーカー側がマンションの解体を決めたという事案も発生。

逆に歴史的建造物は、その周囲に広がる街の方が後から形成されていることがほとんどである。そして、歴史的建造物の種類や立地によって、周辺の街の開発状況は異なってくる。

例えば、城とそれに続く城下町であれば、城という点から城下町という面的な広がりまでもつ。

他方、神社・仏閣の場合、明治神宮の表参道のように参道が開放されていれば、線的・面的広がりがある。しかし通常、参道は神社・仏閣内にあるので、景観上、周囲の街との関係でいえば、そこだけ閉鎖された点としての景観要素となる。実際、ゼミ生が自宅（実家含む）近隣の寺社を調査したところ、街の景観の大きな要素にはなっていないものが多かった。また、寺社と街との関係性についても、寺社の敷地境界ギリギリまで宅地になっていたり、住宅街に突然、真っ赤な鳥居が現れたりと、街とは独立した存在であるものが多かった。寺社であるからそれでもいいのかもしれないが、須佐之男神社は周囲の街とよく溶け込み、孤立していない印象がある。鳥居付近が道路から見通しがよく、少し開けているところが、他の寺社との違いだろうか。

後継者不足に悩む神社・仏閣も増えてきていると聞く。景観の一部として孤立した存在にならないことが一つの解決策かもしれない。